慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フエルヂナンド・ラッサルと独逸労働者（四）「公開答状」及び其批評
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.9 (1917. 9) ,p.1189(57)- 1214(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19170901-0057
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170901-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彼等の武運拙からんには統一問題の解決も不可能とならざる可かず。されど南スラヴ民族の心頭に靈火は既に點ぜられたり。彼等は既に國民主義の新理想に燃えつゝあり。戰場の形勢に依り、解決の時日に遲速を來すことあらんも、南スラヴ統一の機運の到底人力に依て阻止され難きは、伊太利及獨逸に於ける過去の國民的統一の歷史に徵するも明なり。ロバート、セシル卿が『セルヴィアの老偉人』と評せるパシッチが『南スラヴのピヱモン』のカヴールたるを得ると否とを問はず、此の新ピヱモンを中心とする統一運動は、早晩或形に於て實現の期あるべきを疑はざるなり。

フエルヂナンド・ラッサルと獨逸勞働者（四）

「公開答狀」及び其批評

小泉信三

九

叙事は少しく前後する。一八六三年二月ラッサルが「權力と正義」を公にして進歩黨との關係を斷絶した時、一方に於て同じく進歩黨に失望したるライプチヒ勞働者委員會とラッサルとの交渉は既に始まつて居たのである。

委員會は二月十日の決議を以て全獨逸勞働者會議召集の檄を移すと共に其翌十一日委員 Otto Dammer の名を以て公式にラッサルに書を送つた。其要旨に曰く、

貴下公にする所の小冊子「勞働者階級と今日の時代との關係」は當地勞働者の間に於て到處非常なる喝采を以て迎へられ、吾中央委員會も全然貴下と所見を同ふす

ることを、勞働者新聞紙上に於て公言したり。一方吾人は切にシユルツエ・デリツチ組合なるものが勞働者に取つて如何なる價値ありやを知らん事を希望す。本委員は其勞働者に貢献し得る所甚だ尠少なる可きを確信するものなれども、今日世上に於てシユルツエの意見は最も權威あるものとして迎へらるゝを以て、而かも猶ほ吾人は勞働者運動が目的を達して政治上、物質上並に精神上に於ける勞働者の境遇を高めんが爲めにはシユルツエ式組合以外別に其途ありと信ずるを以て本委員會は決議を以て「貴下が最も適當と信ずる形式に於て勞働者運動及び其手段並びに就中無產者階級に對する產業組合の價値に就ての高見を開陳せられん事を懇請するものなり」云々。超えて一八六三年三月一日ラッサルの之に對する「公開答狀」詳しく云へば Offenes Antwort-Schreiben au das Central-Comité zur Berufung eines Allgemeinen Deutschen Arbeiter-Congresses von Ferdinand Lassalle は公にされた。近世獨逸社會民主々義運動は此時を以て始まると云はれて居るのである。

云ふまでもなく「公開答狀」はラッサルが生涯に於て最も重要の意義を有する著作である。「勞働者階級と今日の時代との關係」に就ての講演を試みたラッサルは一個の學者に過ぎなかつた。彼は漠然勞働者階級の歷史的使命に就て云々したけれども、勞働者階級が其使命を果たす上に於て如何なる實際的手段を取る可きやに就ては彼は全く語る所がなかつたのである。ライプチヒ中央委員會の懇請に應じて「答狀」を公にした時のラッサルの態度は全く是と異なる。彼は實際政治家として何時たりとも實際運動の渦中に投ずるの覺悟と豫期とを以て筆を執り、勞働者に向て其運動の第一歩として現下の形勢の下に於ては先づ何を爲す可きかを示さうとしたのである。彼は先づ勞働者に向つて有ゆる他の政黨より獨立して勞働者階級の利害を（而して勞働者階級の利害のみを）代表する一黨を組織す可き必要を力說し、而して其勞働黨が到達す可き最初の目標としては普通直接選擧法を指示し、更に此階梯に依て第二次に努力す可き目的は國家的補助を受くる生產組合の普及なる事を敎へた。而してラッサルの勞働者運動上のプログラムは（少くも勞働者に向て公にされた限りに於ては）實に是を以て盡きて居るのである。茲に吾々は「公開答狀」に就て彼が如何なる論理を逐ふて此歸結に到達したかを知らなければならぬ。

「公開答狀」は先づ勞働者が政治上に於て取る可き態度を論ずる。是より先き前年十月伯林に於て勞働者大會召集の最初の會議が行はれたとき此問題が討議の主題となつた。而して其時說は二派に分れた。勞働者は全く政治に超然たる可しと云ふ說と、勞働者は進步黨に從屬す可きものなりとの說とであつた。ラツサルは今是に言及して曰く、此說は二者共に謬つて居る。第一に勞働者は政治に超然として居てはならぬ。勞働者の正當なる利益は政治上の自由を獲得することに依てのみ之を伸長することが出來るのである。第二に勞働者が進步黨に從屬するの不可は更に明瞭である。先づ勞働者階級の政治的綱領は進步黨のそれの如く單に豫算協贊權の擁護と云ふが如く狹隘なものではないのみならず、進步黨が假に勞働者の援助を得て善く官僚政府に對して勝利を博し得たとしても進步黨が其利益を市民階級の特權維持の爲めに獨占して勞働階級をして之に均霑せしめざるが如き事なきや否や甚だ覺束ない。加之進步黨の政府に對する態度は不見識を極めて居る。政府が公然憲法を蹂躙しつゝあるにも拘らず進步黨は自ら進んで一切政府との交涉を斷絕することなく、猶依然として議事を繼續し、之に依て普魯西政府をして專制政府たるの實益と立憲政府たるの美名とを併せ收めしむるの擧に出でゝ居る。（前揭「今や何をかなす可き」參照）要するに進步黨は斷乎たる政府に相對するときは全然無力なのである。以上述べたる所に由て勞働者階級が政治上に於て如何なる態度を取る可きか及び其進步黨に對して如何なる關係を保つ可きかは明白である。即ち「勞働者階級は獨立の政黨を組織し普通平等直接選擧法を以て其旗幟標榜としなければならぬ」是れ最も簡單明瞭なる勞働者の政治的綱領である。

次にラツサルは政治問題を終へて所謂社會問題に移り住居移轉の自由、產業の自由及び共濟金庫の問題に就て一言を費したる後、勞働者が切に知らんことを求めたシユルツエデリツチ組合の價値に就て其所懷を述べる。彼れは先づシユルツエデリツチが進步黨內にありては多少なりとも人民の爲めに貢獻する所ありし唯一人なることを承認する。併乍ら之あるの故を以て彼の批評は少しも峻酷を減じない。即ち曰く「シユルツエ・デリツチ產業組合即ち信用、貸付、原料並に消費組合は果して勞働者階級の地位を改善するの力ありや。此問に對する答は斷乎

たる「否」でなければならぬ」其理由は如何。ラツサルは信用、原料組合と消費組合とを二つに分けて議論する。第一に信用組合原料組合なるものは獨立の手工業者の爲めにのみ存在するものであつて眞正の意味に於ける勞働者とは全く無關係である。即ち自ら獨立して營業せず從て資金の借入をも原料の購入をもなすことなき勞働者に取つて信用組合並に原料組合はあるもなきも異なる所はないのである。然るに(イ)獨立の小手工業なるものは漸次大規模なる工場工業の爲めに壓倒せられ、獨立の手工業者は漸次大工場に雇傭せらるゝ眞正の勞働者に沒落しつゝある。從て信用組合及び原料組合は國民中の日々減少しつゝある部分にのみ惠澤を及ぼし得ると云ふ結果になる。加之(ロ)信用組合原料組合は結局無資力なる手工業者を資力ある手工業者と同じ地位に置くと云ふ事を爲し得るに止まる。然るに吾々の目前に横はる事實は有資力なる手工業者と雖も亦新式の大工業とは到底競爭することが出來ないと云ふ事である。して見れば是等の組合はたゞ徒らに大工業との競爭に於て手工業の斷末魔の苦痛を長引かせると云ふに止まる譯である。要するに「是等の組合は大工業に使役せらるゝ本來の勞働者階級には全く觸るゝ所なき一方に小手工業者との關係に於ける結果の全部は則ち斯の如きものに過ぎないのである。

次に問題は消費組合である。まことに消費組合の作用は勞働者階級の全體に及ぶ。併乍ら是れ亦勞働者階級の境遇を改善する力なきものである。其理由は三項に分けて證明することが出來る。

(第一)勞働者階級が蒙る所の不利益は其生產者として受ける不利益であつて消費者として蒙るものではない。消費者としては四民平等、たゞ支拂能力をさへ有するならば勞働者と雖も他と等しく物を買ふ事が出來るのである。たゞ問題は彼等が支拂能力を有たぬと云ふ事である。何故持たぬか。(第二)賃銀鐵則が存在するからである。今日の狀態に於ては「平均賃銀は一國に於て勞働者の生存並に繁殖の爲めに習慣上必要なりとせらるゝ生活費の歸着する」而して現實の賃銀は此點を中心として上下に動搖し、決して久しく此點以上に止まることは出來ぬ。何となれば然る場合には勞働者の生活安樂となり爲めに結婚、產兒の增加を來たし、勞働の給供增加して結局再び最初の水準まで實際の賃銀を引下げなければ止ま

ないからである。反對に又賃銀は決して久しく此點以下に停まることは出來ない。蓋し然る時には國外移住、結婚産兒の抑制に依て勞働者の數從て勞働の供給を減退せしめ、賃銀を再び舊の水準まで引上げる作用をなすからである。是が即ち「冷刻なる賃銀鐵則」ehernes und grausames Lohngesetz である。「此法則は何人も之を爭ふ事は出來ぬ。吾輩は有名なる經濟學者の悉くを此法則の證人として擧げる事が出來る。而して實に自由學派の經濟學者をも擧げることが出來るのである。此法則を發見し且つ證明したるものは正に自由學派に外ならぬからである。」眞實なる勞働者問題の研究は實に此法則の承認を以て第一歩とする。此法則あるが爲めには文明の進歩に基づく生産力增進の惠澤は悉く企業家にのみ歸して勞働者は少しも之に與かることが出來ないのである。即ち生産力增進するも賃銀は依然として生活必要費を離れることが出來ず、又生産力增進の結果として物價低落し、爲めに消費者としての勞働者の境遇が安樂になることありとしても、夫れは決して永續しない。生活の安樂はやがて勞働供給の增加を來たし、次で賃銀の引下を齎らすからである。（第三）茲で再び消費組合に歸ると上述の賃銀法則に照して見て消費組合は抑も如何なる影響を勞働者境遇の上に有す可きかは明白である。消費組合が一部勞働者の間にのみ行はれて一般に普及せざる限りは其部分の勞働者は確かに或程度まで生活困難を緩和することが出來る。併乍ら組合一度び普及して勞働者階級全體を包容するに至れば消費組合の效果は消滅する。蓋し消費組合に依て生活費が低減された程度に應じてそれ丈け賃銀は低落しなければならぬからである。

要するにシユルツエ・デリツチ式産業組合は凡べて勞働者を救助するの力なしと云ふ結論になる。然らば組合の原則は勞働者の境遇改善の上に於て寸毫の用をなさぬかと云へば決してさうではない。然らば如何にして組合の原則に依て勞働者を今日の境遇より救ふ事が出來るか。ラツサル答へて曰く「勞働者自らを已れの企業家（雇主）となす事、（即ち生産組合を組織する事）是れ實に彼の冷刻なる賃銀鐵則を廢止する所の方法にして而して實に其唯一の方法である」と。勞働者自らが已れの雇主となれば茲に賃銀と企業家利潤との區別は消滅して而して之に代るものは勞働收益（アルベイツエルトラグ）である。是れが「勞働者階級の境遇を改善する爲めの眞實な

る、正當の要求に適へる而して妄想に非ざる唯一の方法なのである。併乍ら之を實現するの手段は如何。勞働者は能く獨力を以て之を成し遂げ得可きか。それは到底不可能である。彼等の空しきポケットを眺めよ。彼の鐵道や造船所や機械工場や木棉工場の經營に必要なる巨大の資本は到底貧困なる勞働者の能く自ら支辨し得る所ではない。其處で勞働者は如何しても國家の補助を仰がなければならないのである。而して勞働者に生産組合組織の資力を供給することは正に國家の最高の義務であり、而して同時に之は國家が其巨大なる信用機關流通機關(銀行)に依て容易に爲し得る所なのである。或は之を以て勞働者が自力自ら助くるの原則を傷けるものなりとなすものがある。併乍ら之は固より當らない。人ありて高塔に攀ぢんとするに當て之に梯子を貸與してもそは少しも彼が自力を以て塔に攀づることを妨げるものではない。同樣に又國家が圖書館、學校を建て又教師を供給するの故を以て國民が自力を以て學ぶことを妨げるものだとは決して云へないのである。

加之、元來國家とは抑も何ぞや。以爲らく國家は勞働者の一大組合に外ならぬ。其國家が勞働者の組合に援助を與へるのは要するに勞働者自ら勞働者を助けるものではないか。何を以て之を云ふかと云ふにラッサルは一八五〇年に於ける納稅者名簿を引用して年所得四百タアレル以下を收むるもの實に普魯西全人口の九割六分强を占むるの事實を示し、斯の如くなれば則ち貧乏人の組合即ち國家に外ならぬと論結して差支ないと云ふのである。

「勞働者の自由團結、併乍ら實に國家の手に依て保護奬勵せらるゝ勞働者の自由團結。是れ實に勞働者階級を現在の荒寥たる境界から脫せしむる唯一の方便である。」然らば如何にして國家を動かして此擧に出でしむ可きか。答へは日月の如く明かである。普通直接選擧法の實現を措いて他に求める事が出來ないのである。「普通直接選擧は獨り諸君(勞働者)の政治的根本原則たるのみならず亦同時に諸君の社會的根本原則であり、一切社會的救濟の根本條件である。是れ實に勞働者階級の物質的境遇を改善する唯一の手段なのである。」諸君、直ちに一の獨逸全國勞働者同盟を組織せよ。而して適法にして平和なる、併乍ら同時に不撓不屈の運動に依て普通直接選擧の爲めに努力せよ。成功の秘訣は一の瞬間に於て最

重要の一點に全力を集中して左右を顧みないと云ふ事に存する。左右を顧みる勿れ、普通直接選擧と稱するものゝ外有ゆる聲に耳を塞ぎげ。斯くして始めて諸君は其目的に到達することが出來るであらう。

有名なる「公開答狀」の要旨は斯の如きものである。（全集第二卷四〇九――四四五頁）

十

「公開答狀」の歷史的價値は云ふまでもなく其政治上に於ける勞働者の獨立代表を强く主張した點、殊に當時官僚政府と進步黨との衝突が世の注目を獨占しつゝありたる時に際して、進步黨に依て代表せらるゝ所謂人民の利害の外別に單獨に代表されなければならぬ特別の人民の利害があることを明白に示した點にあるのである。歷史の敎ふる所に從へば勞働者階級は從來常に市民階級の背後に隱れ、若しくは市民階級の士卒として市民階級の利害を自家の利害として幾多の革命に參加し來つた。併乍ら、市民階級の發達、從て勞働階級の發達或程度に達するときは必ず後者は分離して獨立に自家の利害を主張する。今獨逸の勞働者階級は少くも形を成した實際運動に於てはラツサルの「公開答狀」に依て促がされ之を機會として、此歷史的「分離」を遂行せんとした。此に此文書の歷史的意義は存するのである。併乍らラツサルが殊更に「憲法爭鬪」正に酣なる時に當つて別に進步黨以外に人民の利害を代表する一運動を起さんとしたのは果して時機の當を得たるものなりや否やは議論の存する處である。まことに勞働者階級は市民階級とは異なる別の利害を有て居る。併乍ら封建的官僚政府に相對するときは此二階級の利害は共通でなければならぬ。勞働者階級の獨立運動は進步黨對官僚の爭鬪が先づ終了したことを前提とす可き筈である。然るにラツサルは當面の敵たる進步黨を憎むに急なるの餘り屢〻、其「戰友」を捨てゝ敵陣に赴かんとするの傾きを示したのである。それが爲めに進步黨よりも更に急進的なる可きラツサルは却て屢〻反動主義者の喜び且つ利用する所たらんとしたのである。既に「公開答狀」に對しても之れ丈けの批評は下すことが出來る。更にラツサルが實際運動を起すに及んでは彼は一層此批評を免るゝに途なき窮地に陷らざるを得なかつたのである。

普通直接選擧の實現は勞働者政治運動の目標として撰擇を誤つたものではない。加之當時政界の形勢に於てそれは必しも實現の見込のない事ではなかつたのである。ビスマルクは進歩黨との衝突に於て兎に角窮地（ザツクガツセ）に陷つて居た。選擧法を改正して政界に更に一層民主的なる要素を加へることに依て（若しくは斯く揚言することに依て）當面の敵を牽制することは此時に際して確かに一策たるを失はなかつたのである。且つ當時宮廷、高官の間に於ける輿論も實際之に傾かんとして居つた事實をラツサルは或る緣故に依て知る事が出來たのである。故に普通選擧權の要求は決して時宜に適せぬものではなかつたのである。たゞ吾々の知らんと欲するのはラツサルが果して幾許の實際的效果を普通選擧に期待したかと云ふ事である。ラツサルは既に「勞働者綱領」中佛蘭西の二月革命後に實現された普通選擧法に就て或熱情（エンシヤズム）を以て語つて居る。併乍ら其の佛蘭西に實現されたる普通選擧制度は如何なる始末を示して居るか。普通選擧に依て成立した國民議會は一八五〇年五月自ら普通選擧制を廢止して制限選擧に復歸し、引いて奈翁三世をして普通選擧回復の美名の下にクーデターを行はしめた。民衆の自覺未だ充分ならざる場合には普通選擧は極めて容易に反動政治家の利用する所となるのである。而かも當時佛蘭西の民衆は一八六〇年代に於ける獨逸人よりも遙かに多くの社會主義的敎育を受けて居たのである。Rodbertus が此問題に關しライプチヒ勞働者委員に書を與へ、普通選擧は必しも勞働者階級をして政權を掌握せしむるものに非ず。まことに普通選擧權は或目的の爲めの手段に外ならず、然れども此手段は各種の目的――實に極端なる正反對の目的に供用され得るものなることを忘る可らず。余は普通選擧が必ず諸君の揚言せる目的に導く可きものなりとは信ぜざるなりとの意味を述べたのは正當であつた。ロオドベルツスがラツサルの懇請にも拘らず、來つて其實際運動に參加しなかつたのは主として普通選擧に對する反對に基づくのだと云はれて居る。

最後に問題となるのは賃銀鐵則である。云ふまでもなく此法則はラツサルの獨創に係るものではない。ラツサルが之れをリカルドオの賃銀法則から得たと見ることは何人も異議なき所であらう。リカルドオは其「經濟學並に租稅原理」第五章に於て先づ勞働の自然價格と市場價格とを分つ。彼に從へば自然價格は勞

働者をして己れ自身を支へ並に增減なく其種族を保存せしむるに必要なる價格にして習慣上勞働者及び其家族の維持に要せらるゝ食物必要品、便宜品の價格に依て定められるものである。一方勞働の市場價格は現實に勞働に對して支拂はるゝ價格で時々の需要供給の比例に依て定められるものである。市場價格は常に自然價格に一致せんとする傾きを有つ。市價若し自然價格以上に上る時は勞働者は健康なる數多き家族を養ふ事を得て結局勞働者の數を增加せしむるに及んで始めて賃銀は自然價格まで低落する。反對に市場價格、自然價格の下に下降する時は勞働者の狀態は窮困を極め、欠乏の爲め勞働者の數減少するに及んで勞働の市場價格は自然價格まで上昇すると云ふのである。

同軌の學說は更にリカルドオ以前の多くの著者に就ても見出す事が出來る。リカルドオと同趣意に解釋し得らる可き國富論中の章句を引用し來るとは姑らく措くも他の一例は Turgot に於ても之を見る。チユルゴオは其一七七〇年の著「富の形成と分配に關する省察第六節に於て曰く「腕と勤勉とのみを有する單なる勞働者は其苦役を他人に賣るとに成功せざる限り何物をも受くるとなし。彼は其れを或は高く或は廉く賣る。併乍ら此價格は彼一人に依て定まるものに非ずして勞働を買ふものと彼れとの合意の結果として定まるなり。前者は出來る限り少くを支拂ふ可し。彼は多數の勞働者中より撰擇をなすとを得るを以て彼等の中最も低廉に働くものを取る。故に勞働者は相互競爭して其價格を引下ぐ可く餘義なくせらるゝなり。各種類の仕事に於て賃銀は必ず常に勞働者の生活必要費に限らる可き筈にして事實に於ても亦然りとす。」（アツシユレエ英譯第八頁）』

是等經濟學者間に承認せられたる賃銀法則の悲觀的色調を少しく强めて之を社會改造運動の論據とした丈けがラツサルの爲し得た所である。併乍らラツサルの賃銀鐵則には何等の獨創なしとの批評は正當でない。何となればラツサル自身此點に就て決して創見の名譽を要求して居ないのみならず、既に上に述べたる如く彼は此法則を經濟學者間の定說なりとし寧ろ其定說たるの權威を以て勞働者の承服を强いんとさへして居るからである。故に問題は獨創如何の點に存せずして、ラツサルが承認し且つ最も無條件の形ちに於て主張したる法則其者の眞價如何の點に存するのである。

賃銀鐵則は勞働市場に於ける自由競爭を前提として居る。故に吾々も姑らく其前提の下に於て、即ち職工組合又は國家の立法的干涉なきものとの前提の下に於て之を批評する。第一に何人も容易に心着くのは此法則が最初から極めて一方的に形くられてあると云ふ事である。賃銀鐵則は勞働市場に於て需要を左右する働因を全然閑却して、賃銀決定の原因を偏へに勞働の供給に求めやうとする。而して其勞働の供給を左右するものは是に從へば、人口の法則である。即ち賃銀高まれば人口從て勞働の供給增加し、低落すれば人口即ち勞働の供給は減少する。故に賃銀は生活必要費を中心點として上下に動搖し、常に之に歸着せんとする傾きを有つて居ると云ふのである。要するに生活の餘裕は必ず產兒の增加を齎らすと云ふ斷案の上に此法則は立てられてあるのである。併乍ら此斷定は勞働者の賃銀が均一でなく熟練勞働者無精練勞働者との間に著しき賃銀率の高低があると云ふ事實に逢つて忽ち蹉跌する。何となれば此場合高き賃銀が生活必要費と一致して居るものとすれば人口は漸次減少して無精練勞働者の賃銀は高き賃銀と一致するまで引上げられなければならぬ。反對に低き賃銀が生活必要費と一致せるものならば精練勞働者は餘裕ある生活を營んで居る筈である。鐵則に從へば此の生活の餘裕を消滅せしむる程度まで人口は增加しなければならない道理である。然るに事實は之に反して居る。勞働者間に於ける賃銀率の相違は決して之を一時的變態的事實と觀ることを得ないからである。賃銀鐵則の根底に横はる思想を承認すれば人口增殖率は所得の大小に應じて高低しなければならない筈である。然るに實際に於ては出生率は所得大なる階級に於て特に著しく高いと云ふ事實を認め得ない許りでなく其反對に富裕なる階級に於ては出生率却て小ならんとする傾向をすら示して居るのである。併乍ら是れ丈けでは未だ必しも賃銀鐵則の主張者を屈せしむるに足りないかも知れぬ。何となればラツサルが所謂生活必要費は習慣上必要なる gewohnheitsmässig erforderlich 生活費の義である。從つて高級勞働者が高き賃銀を收めつゝあるも、其賃銀は實は習慣上必要なる彼等の高き生活程度に相應して居るのである。客觀的に賃銀率は高くとも彼等の生活には餘裕がないのである。と辨解することが出來るかも知れぬ。所得多き階級に於て人口增加率特に高からざる事も亦同じ論法に依て說明するこ

とが出來やう。即ち是等の階級は生活程度高きが爲めに多額の所得も亦彼等の生活をして餘裕あらしめないと云ふのである。まことに斯くの如く解釋すれば賃銀鐵則は言葉の上では之を救ふことが出來る。併乍ら同時に其有つて居る悲觀的色彩は全く之が爲めに失はれ從て社會改造運動の理論的根據としては價値がなくなるのである。何となれば同じ論法に依て富豪の所得も亦習慣上定められたる富豪としての生活必要費以上には何等の餘裕を剩さないと云ふ事が出來るからである。反面から之を見れば、勞働者は生活の標準を引上げない限りは永續的に賃銀を高めることは出來ないけれども其習性を改め生活程度を高めさへすれば何處までも賃銀を高めることが出來ると云ふことに歸着する。要するにラツサルの賃銀鐵則は稍兩立し難き二つの目的を同時に追求して居るの觀がある。之を理論上辯護し得るものとせんが爲めには所謂生活必要費は伸縮自在なる「習慣上必要なる」費用でなければならぬ。反之現在經濟社會の畫圖を悲觀的色彩を以て塗らんが爲めには之を絶對的必要費の意味に解釋しなければならぬ。此ディレンマの何れかを取ることに依て此法則は或は其理論的欠陷を暴露し、或は煽動的價値 agitatorischer Wert を失ふの運命に陷るのである。

一歩を讓つて賃銀の騰貴は必然的に勞働者人口の增加を伴ふものとする。併乍ら人口の增加は直ちに勞働市場に於ける供給の增加を意味するものではない。賃銀の騰貴に依て促がされたる產兒の增加が勞働市場に於ける競爭者となつて現はれるまでには孩兒が一個の青年となるまでの年月十五年乃至二十年の經過を必要とするのである。果して然らば賃銀鐵則は（十五年乃至二十年）に滿たざる短時日の間に一般賃銀が或は上昇し或は低落する其動搖を說明す可き根據を有たない譯である。此變動は自分の觀る所を以てすれば今日の經濟組織に必ず免れ難き好景氣、恐慌、不景氣の循環を主なる原因とする勞働需要の變動を度外して は到底之を說明する事が出來ない。而して勞働に對する需要をば、一方的に形成されたる賃銀鐵則は最初から「不變量」として論外に置いて居るのである。

賃銀鐵則に對する批評を玆に止めて次に吾々はラツサルが夫れに依て此法則の作用を廢止せんことを提言した生產組合に就て考へて見なければならぬ。第一に議論の爲めに姑らく賃銀鐵則を承認するとして生產組合は果してラツサル

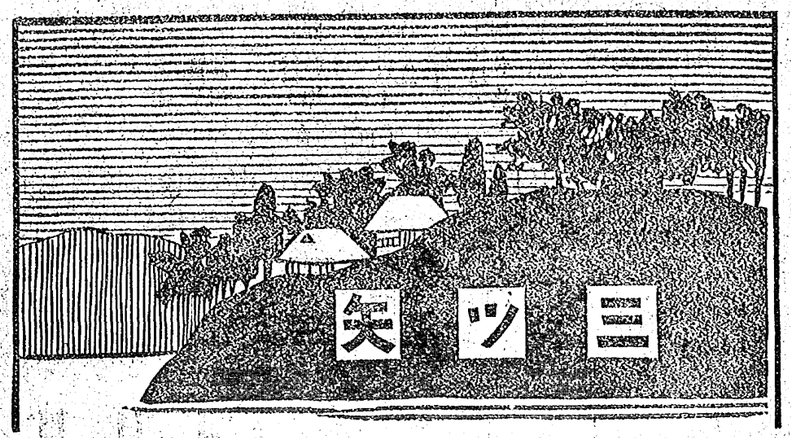
の云ふが如く勞働者を此法則から救濟するであらうか。自分は決して然りとは思はぬ。勞働者の所得が生活必要費以上に高まれば必ず人口が增加し、勞働者間の競爭が激烈となつて賃銀は再び舊の水準まで引下げられると云ふ事は勞働者が生產組合を組織して自ら己れの雇主となることに依て變更されるであらうか。勞働者は賃銀の代りに利潤若しくはラツサルの謂ふが如く勞働收益を所得として收受する。併乍ら斯く所得の性質が異ることに依て賃銀鐵則の根底をなす人口法則の作用が一變するであらうか。自分は其の然る所以を認めないのである。所得が高まれば人口は同じく增加するであらう。而して其增加せる人口は今や成程勞働者としてゞはなく併乍ら企業家(生產組合員)として相互に競爭す可き道理である。而して此の競爭の激甚は勞働者の所得が生活必要費まで低下するに至つて始めて止む可き筈である。由て之を觀れば生產組合を組織すると否とに拘らず勞働者の所得は常に「一國に於て勞働者の生存並に繁殖の爲め習慣上必要なりとせらるゝ生活費に歸着す」可き筈である。今日の世に於て賃銀鐵則が行はれるならば生產組合普及の曉には「勞働收益の鐵則」！が行はれなければならない筈である。

併乍ら生產組合に對する更に根本的の批評は別にある。ラツサルは既述の如く賃銀鐵則を以て現在の經濟社會を攻擊して居る。其の歸着する所は現在の社會に於ては勞働者は甚だ不充分に酬ひられてある。若しくは勞働者は勞働果實の全部をば手中に收めることが出來ないと云ふに外ならぬ。果して然りとすれば問題は如何にして勞働者の所得を增す可きやと云ふに止まる譯である。併乍ら勞働者問題の全體は決して之れを以ては解決されないのである。所得の不充分と云ふ事は何時の時代に於て社會下層民の免る可らざる運命である。たゞ所得の不充分に加ふるに「生存の不安」を以てする時茲に始めて現在社會に特有なる勞働者の境遇は定められるのである。今日勞働者は何人の力も左右することの能はざる景氣の動搖の爲めに絕えず失職の危險に脅かされつゝある。而して此の景氣の變動は商品生產、即ち利潤を目的とする生產と自由競爭とが繼續する限り到底之を根絕することが出來ない。資本主義社會に於ける勞働者の地位は此一點に於て其特異の本色を示すのである。然るに生產組合は此肝要の一點に於

て勞働者の境遇を改善す可き何事をも爲すことが出來ないのである。生産組合は勞働者を企業家にする。併したゞそれ丈けである。組合員自ら勞働するの一事を除けば生産組合も株式會社も原則に於て異なる所はない。生産組合の成功失敗も亦株式會社の場合と同じく幾許の利潤を擧げ得るかに依て定まる。而して其利潤は如何なる程度まで投機が適中するか及び如何なる程度まで競爭者（他の生産組合）を排斥し得るかに依て定まるのである。之ある限り生産組合に依て齎らさるゝ改善は今日の經濟組織の本質に觸れない改善であると云はねばならぬ。生産組合の利潤に向つての努力、其相互間の競爭は依然として恐慌不景氣好景氣の循環の原因となり勞働者が生活の不安は少しも之に依て除く事は出來ないのである。利潤の爲めに生産する大資本家に代ふるに同じく利潤を目的とする小資本家の多數を以てす。是れが生産組合の成功した場合に到着す可き最終の目標である。利潤の爲めの生産を主義とする生産組合と消費の爲めの生産を原則とする消費組合又は集産主義（コレクチヴズム）とは此點に於て全く正反對の方向に歩みつゝあるものである。要するに利潤生産即ち販路の爭奪を承認する限り、生産組合の成功なるものは必ず一部生産組合の成功を意味する。何となれば全部の成功と云ふ事は爭鬪者雙方の勝利と云ふと同じ無意義に報ずるからである。若し生産組合全體を成功せしめんとするならば是等の凡べてを結合統一して獨占的地位を占めしめるより外はない。然るに利潤の爲めの生産なる原則を是認しつゝ生産者を獨占の地位に居らしむるは多數消費者の利益を之に比較すれば遙々少數なる生産者の利益の爲めに犧牲にするの結果に終る可き事トラスト、カルテルの場合と毫も異なる道理はないのである。

事實上英佛獨諸國の經驗に徵するに生産組合の試みは今日まで殆ど全く失敗に終つて居る。たゝ消費組合と聯絡を保ち、消費組合の爲めに生産を行ふ事に依て存續を維持して居る少數の組合を除き其他の者は凡て失敗に終つて居る。失敗と云ふのは二の意味を持て居る。第一は企業として成功すると同時に生産組合たるの本質を失ふ事である。第二は抑も企業として失敗するとである。即ち或者は兎に角企業としては成功して其存續を維持して居る。併乍ら其内部に於て勞働者自らを己れの雇主にすると云ふ生産組合の本義は何時しか失はれて、組

合員ならざる賃銀勞働者と勞働せざる出資者の分岐を生ずるに至つたのである。第二の場合は極めて簡單である。生産組合の多數は大資本家企業と到底競爭する事を得ずして滅亡したのである。其原因として通常經濟學教科書は他の資本的企業と競爭する上に於て資本の不充分なる事、經營の才ある支配人を得難き事、經營内に於て規律を維持するの困難なること等を擧げて居る。併乍ら記憶せねばならぬ是等生産組合失敗の原因として數へられるものは何れも其私的企業としての失敗の原因である。假りに是等の原因が除かれて生産組合が企業として成功したとしても其本質に關する前述の疑問は猶ほ其儘に殘されて居るのである。



サイダー
平野水
紀念飲料
コロナ

三ツ矢の三大特色

一 御料品製造の特別なる恩命を拜受せる事
一 天然炭酸瓦斯純良にして豐富なる天然炭酸瓦斯噴出する事
一 胃腸、糖尿、腎臟、氣管、婦人病に特効ある鑛泉にて壜詰する事

以上の三大特色は他の清涼飲料水にはありません

三ツ矢サイダー
三ツ矢平野水　製造元
帝國鑛泉株式會社